

# ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

## 第11回 私たちの信仰は神の忍耐の賜物です

### 第6章⑨節から⑫節 一人前のキリスト者の生活(2)

⑨しかし、愛する人たち、こんなふうには話してはいても、私たちはあなたがたについて、もっと良いこと、救いにかかわることがあると確信しています。

⑩神は不義な方ではないので、あなたがたの働きや、あなたがたが聖なる者たちに以前も今も仕えることによって、神の名のために示したあの愛をお忘れになるようなことはありません。

⑪私たちは、あなたがたのおのおのが最後まで希望を持ち続けるために、同じ熱心さを示してもらいたいと思います。

⑫あなたがたが怠け者とならず、信仰と忍耐とによって、約束されたものを受け継ぐ人たちを見倣う者となってほしいのです。

この前、全部は語り切れなかったので、今回は途中からということになりますが、第6章の、

「神がお許しになるなら、そうすることにしましょう」という③節のところから⑧節のところまでを学んで来ましたので、ここでもう一度幾つかのポイントを確認し、それから⑨節以降の学びを進めてゆきたいと思います。

6章①②だから私たちは、死んだ行いの悔い改め、神への信仰、種々の洗礼についての教え、手を置く儀式、死者の復活、永遠の審判などの基本的な教えを学び直すようなことはせず、キリストの教えの初歩を離れて、成熟を目指して進みましょう。

③神がお許しになるなら、そうすることにしましょう。

④一度、光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり、

⑤神のすばらしい言葉と来るべき世の力とを体験しながら、

⑥その後に墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち帰らせることはできません。神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱するものだからです。

⑦土地は、度々その上に降る雨を吸い込んで、

耕す人々に役立つ農作物をもたらすなら、神の祝福を受けます。

⑧しかし、茨やあざみを生えさせると、役に立たなくなり、

やがて呪われ、ついには焼かれてしまいます。

この「一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになる云々」と書いてあるところ、ここの「一度」という言葉は非常に大事な意味をもった言葉です。

新約聖書の中では、ここと同じ「一度」という用語は全部で15回使われていますが、その中の8回がこのヘブライ人への手紙に出てくる言葉なのです。従ってこのヘブライ人への手紙は「一度限り」という「一回性」を色々な意味で大変大事に考えている書物だと考えてよいだろうと思います。

「神の選びは一回限りである、神の創造も一回限りである、神の赦しも一回限りである」という文脈の中でこれから後を語ろうとするわけです。

「一度神の光に照らされて」という「光に照らされ」という言葉と平行して書かれている「天からの賜物を味わい」というこの二つの言葉に関しては、信仰の先達である多くの神学者たちが色々なことを語っています。

例えば、「光に照らされ」というのは「バプテスマを受けること」であり、「天からの賜物を味わう」というのは「聖餐にあずかること」とであると。

だから、「神の御前に一度バプテスマの恵みを与えられ、聖餐にあずかることをゆるされ続けている人」ということを前提にして信仰生活を始めた者たち、しかも神の恵みによってそれを支え守られている者たちが、神に対して服従をしなかった場合は…となる訳です。神の恵みは一回であり、そのためにこそすべてを献げてくださったイエスの命に関わるそうした貴い問題を、軽率に考えたり、適当に扱うような人に対しては、神の恵みはもはや通用しなくなるという立場で、この御言葉を説明する方もいるのです。<sup>333</sup>

あるいは、神の啓示をいただき、御言葉のひらめきを与えられ、神の大きな罪の赦しにもあずかり、大いなる神の恵みを体験しながら、それでも神に従わない人間は…とも訳すこともできるでしょう。

解釈によって色々な訳が出て来るわけです。そういう点で、著者がどういうつもりでこの言葉を書いたのかははっきり言い切れないのですが、少なくともこの「一度」という言葉の中に含まれている内容としては、「イエス・キリストの贖罪の事実、あのカルバリの十字架の事実、あるいはイエス・キリストの受肉の事実、イエス・キリストの復活の事実、イエス・キリストの昇天の事実、というようなイエス・キリストに関わる出来事」があるのです。

(一度墮落した者、脇道に落ちた者)

神が歴史の中に与えてくださった、それらの出来事を本当に自分たちのものとして受け止め、それによって生きている恵みを神から与えられていながら、いつか知らぬ間にこの世の基準の中に押し流されて、信仰が光失せたものになってしまっている人々にとっては…ということにもなるわけです。

私たちが神の御言葉に従って生きる、その神の素晴らしい御言葉は、即ち、私たちを生かしていく力を帯びた御言葉だということです。ですから、私たちを生かしてゆく御言葉をいただきながら、その御言葉に従って生きていない事実、これに対して、「墮落した」という訳が出てきますけれど、この「墮落した」と訳されている言葉は旧約聖書の箇所や他の書物で読んで見ますと、「そこから迷い去った者、迷い出た者、あるいは脇道に落ちてしまった者」というような意味で使われているのです。

ですが、新約聖書の中でそういう使い方をしているのは、この手紙のこの箇所だけです。言い換えると「一度神によって贖われ、救われていながら、その御言葉に従わないで福音信仰を放棄してしまったような人に対しては」という意味にまで踏み込んで使っているので、新約聖書の他の箇所にはそういう扱いはほとんど見られないのです。

「ただ一回限りだけ」ここで使われているわけですから、ヘブライ人への手紙の著者が本気になって彼らが置かれている状況の中で「今」すがり付かなければならないものが何なのか、自分を建て直して行くために、今、必要なものは何なのかを語るためにはどうしてもここで「墮落」という言葉とか、「一回限り」という「一度」という言葉とかを使わなければならなかったのです。だからこの部分は実に重要なことが語られているのだということです。<sup>334</sup>

ですから⑥節は、イエス・キリストを信じる福音信仰から墮落した者、あるいは、そこからずり落ちた者、言い換えれば、迫害（具体的な力による迫害もあるでしょうし、文明的な文化的なものによる迫害もあるでしょうし、あるいは知らず知らずのうちに犯してしまう日常生活の慣習化された迫害もあります）に負けて信仰を断念した者への厳粛な宣告なのです。

私たちの目には、今、迫害が起こっているようにはあまり見えませんが、実は、日本というような国の中に住んでいますと比較的簡単に福音信仰からずり落ちることが「できる」のです。しかも、ずり落ちながら自分ではまだ信仰に立っていると思っている、落ちたとは思っていない。そういうありようも「ある」ので、（つまり、そんな風に半端に生きている姿も実は大きな意味をもっているのですから、）この箇所は、私たちの国民性とか民族性に対して示されている大切な箇所なのだ読むこともできるのです。

では、私たち自身がここで何を考えていかなければならないか。それは、神がなしてくださった恵みの御業を本気で受けず、喜んでそれが自分の命となるような生き方をしない者は、よしんば自分が神の民でありたいと欲したとしても、それはもう「できない」ことだということです。

「キリストの十字架は、人間の歴史の上では一回だけ、あのカルバリの丘に立てられたのであり、もう一度十字架についてくださいとは言えないのですよ」と語りかけています。

「悔い改める」とは、私たちの生きざまを今度は神の方向に向けて歩み直すことですから、それを止めてしまうのは、再び神を無視し、排除して生きること、神を捨てたことになります。<sup>335</sup>  
だから、「一度捨ててしまったものは、もう一度拾おうとしても拾えません」ということです。

「かつて、旧約時代にあなたがたが一度拾った信仰をあなたがたは捨てたけれど、神はそれを大きな憐れみをもってお返しくださった。それが御子イエスの受肉であり、御子イエスの十字架の受難だった。しかし、そうまでして極限まで愛してくださっているのに、そのことに心を留めず、尚も自分の思いのままに生きていこうとしているのだから、もはや神の前に立ち返ることができなくなるのです」と大変厳しい語調で語るのです。  
ですが、そんな語調で語った著者が、⑨節になると突然まるで違った表現をとるのです。

#### 第⑨節、

「しかし、愛する人たち、こんなふうに話してはいても、私たちはあなたがたについて、もっと良いこと、救いにかかわることがあると確信しています」

何か、こう④節から⑤節を語った、あるいは⑥節のところで彼が主張したと全く違うようなことが、この第⑨節のところで語りかけ始められています。  
なぜそういうことが起こっているのか、私たちは関心を向ける必要があるのではないのでしょうか。

私たちは今、神の豊かな恵みが与えられて生きている。イエス・キリストの赦しによって、今在ることが保障されている。だが、神の民である恵みによって生かされていることを忘れ去っているとすれば、それは、あざみや茨が茂った土地のように、もはや打ち捨てられ、荒れ地になる以外ないのです。「惜しげもない無為の生活、喜びのない、感謝のない、讚美のない殺伐とした生活をする以外に道はない」と言っているのです。<sup>336</sup>

ここでは非常にはっきりした形で、信仰をもって生きる者は、潤いのある、緑の若草を萌え出させる土地と同じように、実りを豊かにし、他の者に生きる喜びを与え、感激を与え感動を与える存在なのだと言っています。

しかし、あなたがたの生活が、他の人々に生きる喜びを与え、感激を、感動を、潤いを与える存在になることなしに、他の人々の心を殺伐とさせるような生き方をしているとすれば、それはもはや、神に向かって生きてはいないと言われているのです。

著者の率直な気持から言えば、「あなたがたは今、枯れた土地になりかけている状況にあるから、努めて若草の芽が萌え出るような自らに変わりなさい、砂漠になりきらないうちに(なってしまったら終わりなのだから)変わりなさい」と警告しているのです。

「なってしまったら終わりだから、砂漠になり切らないようにしなさい」という勧めは、相手の現実の生きざまから考えると、「あなたがたは世の中を眺めているから、そんな風を感じてしまうのだろう。」という客観的な言葉でもあるでしょう。

「どんな良い業をしてみても、それがこの歴史を変える力にはならない。どんなに祈っても私たちの周囲は変わらない、どんなに善意をもって隣人に仕えたとしても、その人々の魂を救うには至らない、もう、私たちにできることは何もなくなった、現実には私たちが必要としてはいないのだ」こう考えが連鎖になったとたん、あなたがたは砂漠になる。

今、あなたがたが置かれている立場はよく分かるけれども、しかし、その砂漠にイエスは御降誕してくださり、花咲く野辺にしてくださったではないか。その瓦礫の山に主は御自分がお立ちになることによって、御言葉を享受できる潤いある牧場としてくださったではないか。そこにキリストが立ってくださることをしっかり認識できるならば、そこで希望を失うはずはないと訴えざるを得ない状況に置かれているのです。

ここに、「一人前のキリスト者」というタイトル（称号）があります。この「一人前のキリスト者」とは何なのかと言うと、「どんな状況の中に立たされていても、そこにイエスが共にいてくださることが認識できる生き方をしているキリスト者」という意味です。

私たちは近代文明の中に生を置いていますから、どちらかと言うと結論でものを見ることが多いのです。一所懸命やってもいい結果が出なかった、何が足りないのだろうと考える、そういう習癖があるのです。ですから結論でものを見始めると、絶望的にもものを見る傾向が圧倒的に高くなるのです。

愛をもって仕えても通じない、心を注ぎ出して祈っても相手は変わらない現実。そういう現実にも何度も何度もチャレンジしているうちに「ああ、やっぱり駄目なのだ」という絶望感だけが私たちを捉えてしまう。

そして主が扉の外に立って叩き続けていらっしゃることを、少しも考えられなくなってしまふ。そういう生き方をしているのはもはやキリスト者の姿ではないと言うのです。<sup>338</sup>

自分のやったことが、たとえ何の効果も出なくとも、神が期待していることが何一つできなかったと思っても、そこに主が立って共に見ていてくださると信じて生きてゆく時に、その何の効果も出なかった業を嫌がらずにコツコツとやり続けられた恵みの喜びを感じることができるのだ。それが実は、後に出てくる『忍耐』という言葉なのです

この⑨節で、「しかし、愛する人たち、こんなふうには話してはいても、私たちはあなたがたについてもっと良いこと、救いにかかわることがあると確信しています。

と言っていますが、「神の恵み」それは、「私たちが、たとえ不信仰極まりない状態に追い詰められて、しゃがんでいるような状況にあっても、困惑の中に置かれて、にっちも

さっちもいかず歯ぎしりをしている状態にあっても、それがすべてではない、あなたがたにはそれを越えるもっと良いものが与えられているのだ。現実があなたを生かしているのではなく、あなたを生かしているのはイエスだ。そのお方が、あなたを支えてくださることをしっかり覚えるならば、現実がどうであろうと、そこに神の勝利を見るだろう」と告げています。

これは正に、あの日すべてのものが暗黒に包まれたベツレヘムの郊外で、不思議な星がきらめいている下に立っていた羊飼たちが、寒さの中で羊の群れを気遣い、あるいは夜更けに襲ってくるかもしれぬ野犬の群れに心を配りながら、できる限り注意深く、しかも恐れに震えながら、時を過ごしていたその真っ只中で、「恐れるな」という声を響かせてくださった神の、「今こそあなたがたに救い主が与えられるのだ」という貴い御告げ、これが福音なのです、喜びの知らせなのです」<sup>340</sup>

この「喜びの知らせ」というのは、自分たちが予想することもできなければ、計画することもできなかった出来事、何度もチャレンジしたけれども失敗した出来事だった。そういう出来事が神の一方的な恵みによって、今宵、実現するのです、そういう御告げがあったのですから。彼らはそこで大きな喜びを感じたのです。

「救い」とはそういうものです。あなたがたは現実を前にしてどうしたら神の要求に自分が合致する者になれるかと汲々として生きるのではなく、（もう少し別な表現で言えば、自分の罪だけに目を留めて、どうしたら罪のない生き方ができるだろうかと心を配り、一生懸命になるより、）むしろ「赦しの福音の中に思い切って飛び込みなさい。そのことによってキリストの恵みに生きることが出来ますよ」と著者は告げるのです。

よく私たちの使う言葉の中に、「ふさわしい」という言葉があり、「信仰者にふさわしい生き方をしているかどうか」などをお互いに話し合います。「信仰者としてふさわしい生き方」とは、私たちに何ができるのかとか、何をしようとしているのかということがとかく問題になります。自分自身の生活の中に、「神を信ずる者はかくあらねばならない」という非常に崇高な一つの間人像を描き出し、そういう人間像に自分が近づけるように、人格や品性の向上に一生懸命になることに執着し、熱心にそれを鍛えあげていこうとする。そういうことが「熱心な信仰生活をしていることだ」と考えてしまう人が沢山います。

ところが、「あなたがたはそういうことに失敗したからこそ神に赦されたのだから、赦されていなかった時代に戻って、もう一度そんなことに汲々とすることは止めたらどうだろう。もし今でも、せっかく救っていただいたのだから、そのお方に満足されるような人間にならなければならないと考えているなら、神は『何とお前たちは水臭い』とおっしゃるのではないだろうか」と。そのような言い方を、ここでヘブライ人への手紙の著者は私たちに向かって語っています。（厳しさの中にユーモアを交えて親しく語られた松山幸生先生を想う）

では、「神は私たちをどうご覧になっているのか、それを「不完全な者、不十分な者であるがゆえに他ならぬ神が愛してくださり、憐れんでくださっているのだから、その信仰が神の助けによって成熟してゆけるように願い求めて生きてゆくことが大事なのだ」と言っています。

(成熟とは賜物・恵み)

「成熟」という言葉は自分であることを意味していません。木の実が熟してゆくのも、木自身が熟させるのではなく、下から与えられる養分、外から与えられる光、あるいは風、水、様々なものが、そこに注ぎこまれることによって一つの果実は結実し熟してゆくのです。一生懸命に私が熟した木になろう、立派な実になろうと努力しても残念ながら何の役にも立たない。

正にそれは賜物であり、恵みであり、神から与えられる大きな憐れみに依っているのであって、私たち自身の力で出来上がり、私自身で成り上がっていく、そのように到達できる目標とは違うのです。だから、神が愛してくださった、イエスがこの私のために命を捨ててくださった、神の大きな愛が独り子さえも惜しまないでこの世に送ってくださった、その事柄にあなたがたの思いをいつも集中させ、その御方がいつも支えてくださっているという確信に立って、あらゆる現実に関わって行きなさい。ここに神の愛があるのを片時も忘れないで今日を生きて行きなさい、そういうことがここでは告げられているのです。

341

#### 第⑩節、

「神は不義な方ではないので、あなたがたの働きや、あなたがたが聖なる者たちに以前も今も仕えることによって、神の名のために示したあの愛をお忘れになるようなことはありません」

「神は不義な方ではないので」とありますが、私たちはここを読む時、すごくせっかちに進みがちになります。「神は不義な方ではない神は義なるお方であるだからそういうことなのだ」とばっと読んでしまいますが、あえてこの著者が「神は義なる御方なので」と書かないで「不義なる御方ではないので」と二重否定で書いた理由は何だったんだろうかを少し考えて見たいのです。

私たちの現実を見ると、義であることと義でないことと、その間に「ちょっと義である」こととか、「88パーセント義である」とか等々、いっぱいあるというわけです。そんな中で、「全く義でないという御方ではないので…」というのは、多少の義があったとしたら、それを愛でくださる御方、そのことに目を留めてくださる御方なので、『あなたの小さな一歩をもお忘れになる御方ではない』という読みかえができると、この『不義な方ではないので』という言葉は正に慰めに満ちた表現となるのです」。<sup>342</sup>

つまり、「神は完全なる義の御方ではあるけれども、と同時に、完全に義ではないという人以外は御自分の義に引き寄せてくださり、御自分の義を足らざる義に注いでくださり、

それを満たしてくださり、義の人であると認めてくださる御方なので」ということなのです。

先月の終わりは宗教改革の記念日でした。マルチン・ルターは「神の義」ということを非常に大事に考えました。彼は「神の義」を大きく三つの柱を建てて考え「ただ信仰、ただ恩寵、ただ聖書」（「ソラフィデー、ソラグラティア、ソラヴィブロス」）ということにおいて信じたのです。

神の義がどこに示されているかということ、神が信仰を与えてくださった恵みの中に示されている。しかもそれは神の恩寵であり、顧みであり、豊かな憐れみであり、私たちへのプレゼントである。下支えをしてくださる御力である。この神の義によって私はキリスト者であり得る、と同時に、それは神の御言葉によって保証されたものである、という意味でルターは聖書を大事にしたのです。

この御言葉の中に神の恵みがぎっしり詰まっています。だからこの御言葉に立って私たちが生き続ける限り「神の義」を受けている者として存在しているのです。

私たちがつくる罪の影は神から遠く離れれば離れる程、汚いものとして長く残ります。神に近づけば近づくほどその影は短くなりますけれども、神は神の方に向かっていくことのゆえにそのすべての影を帳消しにしてくださる。罪のない者として取り扱ってくださる、それが「恩寵なのだ」と言っているわけです。<sup>343</sup>

あなたがたには以前、「神は裁き主だ」と語ったけれども、その裁きを受けるべきあなたがたに対して同時に「弁護者」として立っていらっしゃる御方なのだ。「今、私が語らなければならないのは、罪に対して厳しい御方であると同時に、小さな義に対しても、お見越しにならない憐れみ深い神であることを覚えて欲しいのだよ」というように書いてあるのです。

「そのことの方が、今のあなたがたには非常に大切なことだと思う。あなたがたの働きや聖なる者たちに以前も今も仕えることによって、神の名のために示してきたあの愛をお忘れになるようなことはありません。神はどんな小さな事柄であっても、よしんばそれが何の役にも立たなかったような時にも、神の名のためにした業はすべてをご自分の記憶の中に留めてくださり、それを用いてくださろうとしているのですよ」と書いているのです

これはもう一度考えてみるべき事柄だと思います。

「私たちは合理主義の社会に生きていますから、力を出した時に、その力相応の結果が得られないと虚しかったり、不十分だった、役に立たなかったと考える癖がついています。ところが聖書の信仰は神の名のためにしたことであれば、役に立たないことは何一つないと告げるのです」<sup>344</sup>

特に、現実の迫害の中で揺さぶられているヘブライ人に向かってこの著者は、そのこと

を強調するのです。ここで必死になって神の御前に愛の業に励んできても、現実の世界には何の役にも立たなかったなどと諦めないで、あなたがたのしてきた小さな業は神によって用いられて、来るべき神の国を造り上げて行くために欠かすことのできない大事なものとして神に覚えられている。

事を成すのはあなたがたではなくて神なのです。だからその御方のために為すのであれば、小さな石ころ一つ積み上げることであっても、神はそれを無駄にはなさらず、生かして用いてくださるのだと、一所懸命になって語っているのです。

#### 第⑩節、

「私たちは、あなたがたおのおのが最後まで希望を持ち続けるために、同じ熱心さを示してもらいたいと思います」

このように勧めを述べています。

第⑫節、「あなたがたが怠け者とならず、信仰と忍耐とによって、約束されたものを受け継ぐ人たちを見倣う者となってほしいのです」

これは大変面白いモチーフだと思うのです。「信仰と忍耐」という言葉がここで並べられています。神を信じること、これをある注解者は、この信仰と忍耐というのを両方とも自分たちの業として「私たちの神に対する信仰と私たちの忍耐強い信仰生活によって」と読んでいますし、そう読んでいる人たちが比較的多いのです。<sup>346</sup>

けれども、これをもう少し丁寧に読んでいきますと、私たちが神を信じられるように導かれている事実を見据えながら、「私たちが、信じ続けることによって全く良い成果を上げられない駄目な信徒であったとしても、神は忍耐をもってその信仰を完成させてくださる」という「神の忍耐」もこの言葉の裏側にあっているのではないかと思います。いやむしろ「ここで、ヘブライ人への手紙の著者は『神の忍耐』を称えているのではないだろうかと思うのです」

私は毎年、年の始めの礼拝で必ず教会員に向かって言うことがあるのです。

「神はよくも忍耐強く、キリストをお与えになってから二千年もの間我慢してくださっている」ということです。

当然、私たちは滅びなければならない、滅ぼされても仕方がなかった存在であるにも拘らず、神はまだ我慢していてくださっている、そういう神が私たちが愛するがゆえに堪えていてくださる「忍耐」。当然裁いて、合理的にもっと能率良くことを進めようとお考えになってもしかるべき御方が、極めて能率の悪い、非能率的な私を抱えこんで、大事に持ち運んでくださり、信仰ある者として養い育て上げてくださろうとしていらっしゃる、その「忍耐」。それがあからこそ「主を待つ」ことができる存在になりうるのだ、そんなことをどうしても考えないわけにはいかないのです。<sup>346</sup>

本当に私たちは信仰と忍耐とを絞り出して、やっとこさ持ちこたえられる状況の中に、今置かれています。我慢して、我慢して神の言葉を、神の救いを隣人に語りかけ、証し続けていかなければならないような状況の中に私たちは置かれています。

でも、その忍耐は神の忍耐と比べたら、比べものにならないほどちっぽけなものです。イエス・キリストが十字架の上で、「すべての罪が赦された、歴史は贖われた」と宣言されたにも拘らず二千年経っても世界すべてが贖われていない現実。（日本は平均1%以下のクリスチャン人口）神の恵みが恵みとして通用しない。「神はすべてのものをお造りになった」と聖書が何度私たちに語りかけても、「いや、そんなことはない、良いものだけを神は造ったのだ」と考える。

「そういう意味で、私たちは神の御思いに従って、御心を大切にすることではなく、自分たちの常識や見識をすごく大事にして、それに合致するものこそが義であると判断しながら生きている。そんな傲慢な者をも、神は御手の中に支え続けてくださる、固く握りしめ続けてくださって、神の国が来る日には、神の国に入ることができるようにと保ち、堪えていてくださる。そういう神の忍耐によって初めて、私たちは困難な現状の中で、小さな愛を少しばかり実践することが許されている」そういうことではないかと思うのです。

「あなたがたが聖なる者たちに以前も今も仕えることによって」という言葉がこの⑩節のところに出っていますが、この「聖なる者たち」という言葉は、ご承知のように様々な困難の中にありながら、神を信じている人たちを「聖なる者」と呼んでいるのです。別な言い方をすれば、神から選び出していただかない限り、私たちは神によって生かされている恵みを感謝する者にはなれない。私たちが今日尚も、「神様」と呼びかけることができているのは、神の忍耐に支えられているからなのだ、ということを実際に知った故に、神が選び出し、忍耐をもって支えていてくださる方々が「聖なる者たち」なのです。

立派な人たちとか聖人君子たちとか、しっかり教会生活をしている人たちとか、そのように書いてあるわけではないのです。辛うじて信仰生活を保つことを許されている人々も、神の憐れみにあずかっているに違いなく、神の恵みに生かされている人々なのです。

ですから、「聖なる者たち」は、当たり前の状態にはない人々なのだと言っているわけです。ゆえに、イエスをキリストと信じることは、このヘブライ人への手紙を書いた時点においても、今日においても、当たり前ではないことなのです。当たり前ではないことをやろうとするわけですから、それなりに覚悟が必要です。あるいは、それなりに私たちは（肩に力を入れる意味ではありませんけれども、）身構える必要があるのです。この世における当たりの生き方を続けよう願っている限り、私たちは信仰に生きることはできないと思います。

つまり、「聖なる者」という言葉はそういう意味であり、よく「聖なる者」というと立派な人、聖人君子を考えたりしますが決してそうではないのです。「神によって、『当たり前』の状態から取り分けられた人」という意味なのです。だから、信仰生活はある意味で当たり前でない生き方なのです。

とすると、私たちのなしたことがこの世から喝采を受けると、それでは「聖なる者」ではなくなり、当たり前のことになってしまうのです。ですから、この世の人から喝采を送られないような生き方をしなければならないわけです。

「イエスが私たちを救うために神の奇しき御力によって勝利されたならば、この世から喝采を受けたでしょう。ところがイエスは十字架におかかりになったままであられたために誰からも喝采を送られないばかりか罵倒されたのです。神の御子として当たり前ではない生き方をされたわけです。

それが私たちの救いのためになくしてはならないことだった。そういう当たり前でない生き方を自分の生き方として生きる、そのことがイエスをキリストとして信じて生きてゆく生き方であり、そのことが私たちが神から聖なるものとされた証しなのだ」そんなふうに言うことができるだろうと思います。

つまり、聖なる者になることは、私たちは時には大変誤解をしてしまうことが多いわけで、もう一度そのあたりをはっきりさせておく必要があるだろうと思います。そういう同信の仲間たちのために一生懸命何とか神の道を生きたいと模索しつつなしている愛の労、小さな愛の営みが虚しく見られてしまうような現実が、あなたがたの周りには積み上げられ過ぎていてはいても、そんな結果に左右されてはなりません。神はその一つ一つをしっかりと覚えていてくださる。見逃されることはなく神の国の歴史の創造にこれを用いてくださっている。私たちが、自分たちの小さな業をも神は覚えていてくださるといふ、その事柄を本気になって信じて生きてゆかない限り、現実の中で神の御言葉に生きるこの意味を見失ってしまう現実がそこにはあるのだ、という現状認識をこのヘブライ人への手紙の著者は語っているわけです。<sup>350</sup>

この現状については、「今は悪い時代なので」という言葉で、はっきりとエフェソの信徒への手紙の5章⑩節の中にも記されています。

「あなたがたは自分の行動に注意しなさい、今は悪い時代なのだから、この世の力に飲み込まれてしまわないようにしっかり立ちなさい」と言っているわけですが、「確かに今、私たちの生きている時代は神なしに生きることが、痛くも痒くもない平気の平左なる時代なのです。むしろ神に頼って生きることの方が異常な生き方をしているように感じられる時代なのです」。そういう時代の中に生きているのだから、「神から私たちは当たり前でない生き方をするように選ばれた存在であり、聖なる者なのだ」という認識をしっかり持ちなさい」と言っているように思われます。

ですが、「聖なる者」という言葉をそのように捉えると、随分意味が変わってしまうのです。聖なる者でない人間が一杯いて、その人々が立派そうに見えることが多いのです。色々なことに参加してゆくと、クリスチャンじゃない人の方がよっぽどたくさん愛の奉仕をしているのです。そういう量的なものや、人道的な観点で捉えるならば、それは確かにそうかもしれません。

しかし、「主の名のためになしているかどうか」という点において、主はしっかりとそれを区別なさる御方なのです、聖別する御方なのです。あなたがたの業が小さくみすぼらしく乏しいものであっても、主のためにそれがなされているのであれば、それは神によって

用いられます。どんなに立派な大きな業をしても、主の名のためでなかったならば、何の役にも立っていません。平和、シャロームを造る力にはならないのです。<sup>351</sup>

先日、近くの団地に住んで平和運動をしていらっしゃる方と一緒に話し合いをしたのですが、色々なところでNGOの運動を起こしたり、色々なことをなさっているのです。クリスチャンでない人も沢山やっていますけれども。

私はそういう方と出会って、「案外クリスチャンである方が多いのでびっくりしました」などと言われたのです。彼は私と付き合っているから、門外漢のような私たちクリスチャンを認めよう、受け入れようとして、きっとそう言ってくれたのだろうと思います。

私はその方に、「いや、あの、別にクリスチャンでなくてもこの世でいいことをしている人は沢山いると思うし、私たちにできないことを沢山していらっしゃいますよ。でもね、本当の平和を来たらせるには、人の心が帰るべきところに帰らなければならない、結びつけられるところに結びつかない限り心は迷い続けるのです。迷い続ける限りシャロームはないのです。

私たちは小さくて、あなたがたから言えば、何の役に立つかと思うようなことしかできないけれども、一つ一つの心を神に結びつけるために今日も生き、明日も生き、明後日も祈っていこうと思っているのです。それは私たちでなければできない仕事なので、他の仕事はどなたにでもできますから、大いに頑張ってください」と申し上げたのです。

(ここまで人前で言い切れる松山幸生先生だからこそ、国会議事堂前でクリスチャンの代表として独り祈ることがおできになったと思います。)

そうしましたら、彼が「祈ってくださらなければ、私たちもできません」と最後にはおっしゃられたのです。

でも、そういう方は、具体的に何かして「平和に貢献しているような成果」が生まれることが大事なのだという考え方を持っていていらっしゃるのです。よく考えると、いつの間にか私たちも同じような考えを持っているなということを感じるのです。

主イエスは御自分のしていることを、平和に貢献するお仕事だとはおっしゃらなかったことがあるのです。「わたしはむしろ剣を投じるために来たのだ」と。言い換えると、「神に結びつけられていない心があるならば、あなたがたのその心を切り裂いて、結びつけねばならないものに結びつけるためにこの世に来た」とおっしゃっている。だから、この世から見れば「何だ、あいつらはくだらんことやっている」と思われることもたくさんあると思います。でも神の名のゆえにしている業ならば、神はそれを決してお忘れにならない。すごい励ましであり慰めだと思いませんか。

つまり、絶望を感じるような現実の中で、良い結果が出なくても絶望しなくてもいいのです。あなたがたにはどんなに小さく、何の役にも立たなさそうに見えても、神のためになしているとすれば、それはやがて神が豊かな水がを注ぎ、光を注いでくださった時には芽を出し、花を咲かせることができる、神はそれを覚えて大事に育ててくださる。だから、あ

なたがたは現状の成功、不成功あるいは完成、不完成に心を奪われないで、一步一步神の業を進めていこうではありませんか。それが「忍耐」ということなのだと知っているのです。

(忍耐とは)

「忍耐とは、じっと我慢することではない。神がこれを大事に育ててくださると信じて、神におあずけすることなのです」。忍耐という言葉はそう読んでいくとすごく変わるのです。

神がじっと待っていらっしゃるから、あなたがたのした小さな良い行いも、神の御前には大きなこととして受け止められていく。そしてそれを神が用いてくださる日のあることを信じて、その日に向けて一つ一つの業を進めて行きなさい。そんなことをここでは語りかけていると言ってよいのではと思います。

私はこの箇所を読みながら、ここでは、「あなたがたは集団として」というのではなく、「一人ひとりの問題」としてというのがすごく大事なこととして提起されていることを同時に覚えておきたいと思います。

神の御前に生きることは、時に、私たちがあの人この人と手をつないで共に生きることではなく、私一人が御神の前に招かれ、生かされている者として生きることなのです。しかも、それは私一人の問題ではなく、明らかに全体にかかわる問題であるのです。<sup>354</sup>

(「聖なる教会を信じる」とは)

使徒信条の中に「我は聖なる公同の教会を信ず」という一つの告白があります。あれは勿論、聖霊信仰を告白する中に入っているのですが、聖霊の助けによって与えられた聖なる教会を信じますと言った時の「聖なる教会を信じる」というのはどういうことなのだろうかと考えて見ます。それはとても大事なことになるだろうと思います。

たとえば、「私が教会を信じます」と言う時には「教会が私を養い育み、神の民として造りあげてくださることを信ずる」ということなのです。と同時に、それは「私が聖霊をいただくことによって、私が教会を神の教会としていくことができるものとして働けることを信ずる」わけです。「教会と私」というものは、そこでは全く相互作用としてお互いが神の恵みの中で成長させられていく、そういう関わりにおいて信じ合う群なのです。

ですから「教会と私」、「私と同じ信徒たち」という出会いは、お互いが豊かに助けられ、生きるのではなく、「神御自身に庇護され支えれながら、お互いを成長させる群れとして今日も生き、明日も生き、祈り合ってゆく、そういう群が教会なのだということなので、この世では既に完成した教会ではないのです。完成した教会は天にしかないのです」

ですからやはり、私たちの教会は傷を負い、痛みをもった教会なのです。「成長途上にある教会、しかしその成長途上にある教会でありながら、神はそれを『聖なる教会』として、特別に区別した教会として支え憐れんでくださるのです」

だから、私たちは聖なる者にならねばならない、などと張り切ってしまってはいけません。支えてくださっているその恵みを私たちは一つ一つ神の出来事として確認しつつそこで生きていこうではありませんか。人からは「聖なる教会ではないよ」などと言われたとしても、神が私たちを支えてくださっている限り「聖なる教会」なのだということをしかり覚え、「この私が神によって支えられていると同じように、この教会も神によって支えられることによって、やがて来るべき日に天の教会の相似形としてその中に取り入れられて成長し、成熟し、完成して行く。そうした成熟を楽しみにしながら生きる教会として養われて行くことが大事なのだとこのヘブライの信徒に向かって語りかけている」のです。<sup>354</sup>

ユダヤ人たちは、「神殿、掟の箱は完結したものであって完成したものである。だから私たちはその前にひれ伏す以外にない」という教え方をして来たわけですから、そういう人々に向かって「不成熟なものでも神の憐れみの対象になり得る」ということを語ることは、さぞや大変なことだったろうと思うのです。しかし、この著者は恐れなくてそのことを語っています。

「神に支えられ清められていることであっても、それは未だ素晴らしいことでも何でもないのだ。それはむしろ憐れみを受けなければならない存在であることの確認をする過程なのだ。救われた者であるということは喜ばしいことであり、感謝すべきことではあるけれども、同時に、救われなければならないほどの罪人だったのだということ容認すべきことなのだ。

砂漠のような状態であったとしても、それが私たちの現体質であって、そこにある私たちを、愛をもって、潤いのあるものに変えてくださっておられるのは、イエスの十字架なのだ。それを忘れたら、あなたの信仰はないのだ」ということをもう一度語りかけることによって「絶望的になりかけている教会に希望を与え、枯れ果ててしまいそうな信仰にもう一度水を注いでよみがえらせる営み」をこのヘブライ人への手紙の著者は、この⑨節から⑫節までの短い部分で語ろうとしています。

今まで述べて来た建前論、原則論を越えて、更に、あなたがたにはもっと素晴らしい展開がある。それは、イエス・キリストがいてくださることだと語りかけることによって、立ち直りを期待する、そしてそのキリストという御方はどんな御方なのかをもう一度学んでみましょうという、心のゆとりを持たせて「大祭司キリスト論」というものにもう一度立ち戻っていこうとしていることです。

「頭の中で考えた信仰ではなく、今、息づいている信仰を生きてほしいのだ」ということをこの著者は必死になって訴えかけている箇所がこのところではないかなと思います。

パウロも色々な教会に対して発信する手紙の中で、叱責したり問題を指摘したり、お前たちは駄目だと言ったりしていますが、よく途中で「私は語調を変えてあなたに話す」など

とまるっきり雰囲気を変えて話し始めたり、あるいは「この大きな字でわたしは手紙を書いている」などと言って、目の悪いパウロが自分の手による大きな字で手紙を送ったこともあるわけですが、そういうところで彼が語調を変えたのはなぜかといえば、「この私はキリストの憐れみがあったからこそ生かされている。あなたがたに対するキリストの憐れみは、私と同じように届いているのだ、ということはどうしても言わないではいけない、そういう神の愛に迫られて書いたからなのだ」と言えると思うのです。（語調を変えたパウロの心境）

ヘブライ人への手紙は、そういう意味では律法主義の者に向かっては律法的なものを語り、旧約聖書を材料にしながら色々な問題点を指摘していった書物ではあるけれどもその中で「イエス・キリストの愛があるからこそ私はこれが言えるのですよ、そしてイエス・キリストがあなたを愛しているからこそ私はあなたがたに対する愛を、こういう形で表現せざるを得ないのだ」ということを著者自身の思いをも込めて、この箇所では述べているのだと言っても良いと思います。

「一人前のクリスチャン」というのは、むしろ神にすっぽりと甘えて生きている、神の大きな恵みによって今日があることだけを信じて生きている、そういう者であります。そのために、たとえ良い結果が出なくても、神のためにと御前に献げる小さな祈り、小さな奉仕が神の御前には忘れられていないことを信じ、いと小さき業に勤しみ喜んで仕えること、それが「一人前の信者になること」なのです。<sup>358</sup>

難しい教義や教理を無理にマスターしなくてもいい、聖書66巻全部を分からなければなどと言わなくてもいいという優しさや寛容さがそこにはあるだろうと思うのです。ですが、キリストの大きな愛を知れば知るほど、もっともっとその愛を知りたい、究めたいと願うようになりますから、自然と御言葉に対する研讃を積むようになります、神の御言葉を求めてやまなくなります。そうして私たちが御言葉から御言葉へ、信仰から信仰へという養いをいただくことができるようになっていくと思います。

「覚える（忘れずに心に留める、記憶する）ことによって」、私は神の前に救われた者らしくなろうと思っても「覚えている」だけでは、神は決してそれを祝してくださるとは言われません。

そこに、「このヘブライ人への手紙のもっているいわゆる『律法主義の中に育ったヘブライの人』に向かって語っている特別な意味があるのではないか」と思いながらこの箇所を学んでみました。

（1996年11月9日）

写者・あとがき

「一人前のキリスト者の生活」から学ぶことが2回続きました。聖書の箇所は第5章⑪節から6章12節です。このところは私（写者）の胸に痛恨の思いで胸に刺さり通してありまし

たので、自分のために前回の復習をさせていただきます。重複をお許しくさせていただきますようお願いいたします。

(1)信仰の立て直しということが本当に可能なのか、なんと私は甘いことを言っているのだろう。絶望的な気分になりました。

6章④節から⑥節

④一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり、

⑤神のすばらしい言葉と来るべき世の力とを体験しながら、

⑥その後、墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち帰らせることはできません。

神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです。

私はこの箇所を読んだ時、奈落の底に落ち絶望的な気分になりました。もう取り返しのつかない状態になってしまった。午前4時30分に昇る朝日を見ることができなかった。

「死んだ行いを悔い改め、キリストの初歩を離れて、成熟を目指して進みましょう」と励まされても「神がお許しになるなら、そうすることにしましょう」

果たして、神はお許しになるだろうか。期待と不安がよぎる。「死んだ行い」とは何だろうか。その次には何が言われるのだろうか。

(2)著者は、この文脈で「大祭司論」を話したかった。

5章⑩節「このことについては、話すことがたくさんあるのですが、あなたがたの耳が鈍くなっているので、容易に説明できません」だから、著者は話を中断して5章⑩節から6章に渡って、現在墮落しつつあるキリスト者への警告をここに挿入しなければならなかった。

本来なら「大祭司論」という成熟した義の言葉を伝えたかったのだが、「どうも私（ヘブライ人への手紙の著者）の目には「あなたがたは耳が鈍くなっていて、どんなに説明しても正しく受け止めてもらえないので、私は筆を中断して、あなたがたに耳を開くための警告を送る」と言ってこの挿入がなされた。

(3)その趣旨を知って、少し不安が和らぎはしたが、警告が勧告に進むのか、裁きに進むのか恐れは消えなかった。「あなたの耳は鈍くなっている」その通りですと告白する。

マルチン・ルターの声が聞こえてくる。「あなたがたは無気力である。そして注意深く熱心に神の言葉を聞こうとしないで、自分サイドの物差しで、自分サイドの升で量って自分に適当なものだけを受け取っている」と。

聞く耳が固定観念で固まっており、聞き方がパターン化し、自分に都合の良い準拠棒を持ってよしとしている。「もしもあなたがたが、お恵みをいただくことにだけに関心があるような”信仰”を持っているとすれば、それは赤ん坊ですから、神の義などについては…、言い換えるならば「大祭司が私たちのために執り成しをし続けていてくださる」などということについては、何もわからないでしょうし、理解できないでしょう、無理でしょう。」あなたがたは「神は私を救ってくださる御方なのだ。その御方に依って私は既に救われているので、もう感謝なのです。それ以上、私は何を望むことができるでしょうか」と

言っている状態ではありませんか。それは「自分のために神を信じている」という姿勢ではありませんか。」「だから今も、なんとなく教会に属している」のではありませんか。

まさに、私（作者）に突きつけられた暴かれた事実です。具の根も出ません。

(4)「死んだ行い」とは、

「私たちのこの世の知恵や、私たちの慣習や、私たちの経験の産物を一切まとめて、『死んだ行い』と呼んでいます」。

「死んだ行い」というのは別に役に立たなくなったとか、時代遅れになったという意味ではなく、「命」を欠落させた行い、聖霊を無視してしまった行為、私たちの知恵や力や経験に頼った行為、この手紙が書かれた時代でいえば、律法であり、慣習であり、教会の儀式であり、そういったものが「死んだ行い」であると言っているのです。私（作者）に合わせれば「自分の力でなんとかしよう、なんとかしてあげようという傲慢です。

「聖霊が働かなければ何事も起こらないという謙虚さ、これが欠落している」

（ところが、主イエスが3年間の公生涯を歩まれた中で、良いとお考えになったのは何だったかということ「相手がそのことによって生きる」。それが良いことなのです。自分がそこにいることによって相手が生き、喜び、感謝し、希望が持てたら、それが良いことなのだ、私がそこでは見捨てられても、踏みつけられても、排除されても、相手がそのことによって生きられたら、それが良いことなのだと言っているのです。）

(5)「死んだ行いの悔い改め」とは「神への信仰」、それは「あなたの信仰は何に依っているのですか。何に向けて信仰は働いているのですか。それらが問われているのです。イエス・キリストにあなたのすべてがかかっていると信じて、今を生きていますか？あなたが語り、生きてることがキリスト・イエスなしにはできないことなのですか？」と問われています。キリスト・イエスなしにはできないことによって、私たちのすべてが買われること、それがここで言う「神への信仰」なのです。

(6)「一度」ということ

松山幸生先生は、この「一度」という言葉は、物すごく大事な言葉なのです。と言われ、新約聖書の中ではおよそ15回程使われています。そのうちの8回がこのヘブライ人への手紙で使われています。そういう「一度」なのです。（15回の詳細は今回、森容子先生にご教授いただきました。末尾に添付いたします。）

「一度神の光に照らされる」、「一度天からの賜物を味わう」、「一度神の聖霊にあずかる」、ということは、そこで全く新しい事態が展開される、後戻りできない状況の中で私たちが生き始めたことなのです。信仰とはそういうことなのです。悔い改めとはそういうことなのです。

これは、「一度キリスト者として誕生した人間は、二度この世に生まれ直すことはできない、だから一度生まれたことが間違いだった、失敗だったと気がついたら、あなたの生涯は永遠に間違いであり、失敗でしかないのです、やり直しがきかないのです」ということなのです。

「これはすごい言葉だと思いませんか。一度救われたことが確固たるものとして打ち建

てられたとするならば、それはあなたがたの一生を支配するものです。もしあれは間違いだったのだと感じたとすれば、あなたがたの一生は間違いでしかないのです」と言っているのです。こういう厳しさ、激しさを、「私たちは新約聖書の中に生きていますから、余り感じないのです」

「旧約聖書の中で生きた、当時の信仰をもったヘブライ人たちはこのところが良く分かるのです」。「神との『一回の契約』は差し替えが効かないのです」

この松山幸生先生の解説を読んで6章⑤節⑥節の激しい著者の言葉が凄く愛に満ちた言葉に転換しそうな気配を感じました。ロトの妻の例を語られるのです。

例えばロトの妻を見てごらん。救ってやると神はおっしゃった、その代わり代替条件として「後ろを振り返らない」ということを求めた。その契約に従って彼女は救われることになっていたが、「後ろを振り向いた」ために彼女は塩の柱になってしまった。振り返りはできないのだ、やり直しはきかないのだ、決めて出発したら、もうその道にしか進めないのだ。（創世記のアダムとエバの約束不履行も同じようである）

#### (7)自由について

この例示はすごく面白いですがけれどもね、だからこそ「自由だ」と言うのです。

ヘブライ人への手紙ではやり直しがきかない、だから神の言われた通りにすればよいという中で、私たちは生きています。そして、それは日々、神によって新しくされることによって造り変えられて生きていて、昨日のあなたは問われない。あなたが前に進む限り、後ろに残して来た足跡を神はご存じだ、けれども、そのことのゆえに、神はあなたを追求はしない。だから、前に向かって進むことが唯一つの救われる道であるし、そして前に進むことをし続ける限り、神はあなたを恵むと約束してくださったから「自由」ではないか、という、その「自由」なのです。

やっと分かりかけてきた「キリスト者の自由」。暗闇の中に光が見えてきた喜びを私は感じ始めている。

それで、聖書の神は、「わたしの言葉に従って歩み続けているならば、その前がどんなであろうと、わたしはそのすべてを知っているけれど不問に付しましょう。」今、あなたが忠実に神の言葉に従って生きているならば、起訴されるよりは今日を生きた方がいいわけです。投獄されるよりは現実の中で、歴史の中に私たちの歩みを綴った方がいいわけです。だから、あなたがたは拘束され、投獄されなければならないところから解放されているという意味において「自由」なのです。

神の御言葉に従う最初の一步は礼拝です。やっとその実践が出来始めました。

キリストの言葉に従って生き続け、一度救われたら決定的なものだから、それに従い続けている限りでは、私たちのもっている罪責の責任は問われないということが「贖い」という言葉の中にはあります。従って、贖いは、契約によって私たちのものになるのです。そうすることで（利己的、打算的に聞こえるかもしれないけれども）契約というのは「信じ

ること」です。神だけを自分の生きる拠り所「よすが」として信じること、神の言葉だけに全ての存在を託して生き続けること、それが信じることなのです。<sup>326</sup>  
神に従って生きれば、豊かな実を結ぶ。神に従って生きていれば自由を満喫できる。

この最初に味わった不安と恐怖が信仰の喜びに変わる。豊かな恵みを頂いて生きることができる希望が湧いてくる学びでありました。

最後に第10回での大切な学びは「死者の復活」です。

死者の復活の信仰は旧約の中にもあります。イザヤ書（26章）の中にも、あるいはダニエル書（12章）の中にも出て来るのです。勿論、イエス御自身がマルコによる福音書（12章）の中で死者の復活について語られています。あるいは、パウロがコリントの信徒への手紙一の第15章で復活の問題を取り上げていますが、教会の大事な一つの問題が死者の復活だったのです。

つまり、私たちの人生は地上で終わるのではないこと、神は死んだ者をよみがえらせ、生ける者はそのままの姿で神の御前でもう一度裁きの座に立たしめられるという、その後にある永遠の審判ということと結びついてゆくわけです。  
ここからまた新しい深い学びが始まるのです。

本号第11号も森容子先生のご丁寧なきめ細かな熟慮による推敲が数多くありました。そのお陰で本文が更に読みやすくなり、私（写者）は松山幸生先生と森容子先生のお二人の師から学ばせて頂いております。

特に本号締め括りはお二人の合唱です。繰り返しここに記し感謝の意を表します。

「難しい教義や教理をマスターしなくてもいい、聖書66巻全部分かったなどと言わなくてもいいのです、という優しさがそこにはあるだろうと思うのです。

キリストの大きな愛を知ると、どうしてもっとその愛を知りたいと思いますから、御言葉に対する研讃を積むようになります、神の言葉を求めたくなります。そして私たちが御言葉から御言葉へ、信仰から信仰へという養いをいただくことができるようになっていくと思います。」